

B /

信者に與ふる書

東京立教大學校長 元田作之進著

東京 普光社

269
9
208

特47

785

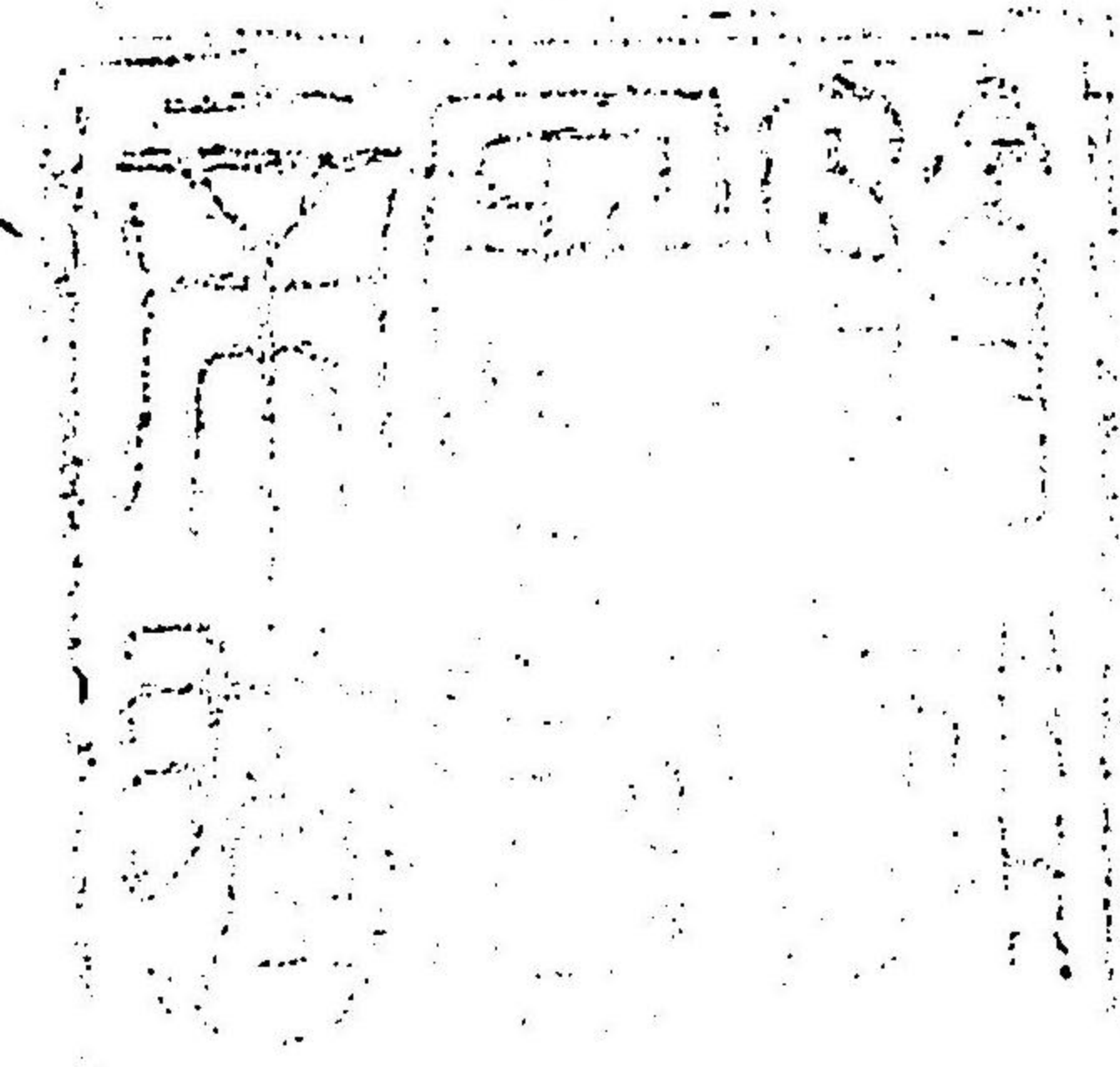
LETTERS TO THE CHRISTIANS

BY THE

Rev. S. MOTODA, Ph. D.



THE FUKOSHA
1, OGAWAMACHI, KANDA,
T O K Y O
1912



目次

一頁	緒言	……
二頁	信者の信仰とは如何なるものか	……
一頁	信者の心理状態は如何なるものか	……
二〇頁	如何に未信者に對すべきか	……
三二頁	如何に信者に對すべきか	……
四四頁	如何に教會に對すべきか	……
五五頁	如何に神に事ふべきか	……
六五頁	如何にキリストに従ふべきか	……
七八頁	如何に己れを修むべきか	……

明治
45. 4. 26

信者に與ふる書

元田作之進著

緒言

予は曩に求道者諸君に一書を送つた、其後未信者諸君に對しても亦一書を公にした、今は進んで信者諸君の爲に述べようと思ふ。現在日本に約二十萬の信者がある、諸君は日本に於て神の召を蒙つた選民である。予は此選民諸君に語らんと欲するのである。而して予が諸君に語らんと欲する事は神學上の議論や、教義上の難問ではない。此等の事に關して疑問があれば、教會の牧師か先輩に就て親しく質されんことを希望するのである。予は信者が日常心得て置かねばならぬ實際の事柄に就て、成

二、信者の信仰とは如何なるものか

二

るべく平易に述べて見たいと思ふ。予は今牧師として説教するのではなく、又教師として講演するのでもなく、諸君と同じく一の信徒として語るのである。予は明治十五年のクリスマスに洗禮を受けて、殆んど三十二年間信者の生涯を送つて来たのであるが、しかし諸君の中には予よりも長き信者の経験を有せらるゝ方もあらう、予よりも深き信仰の生涯を有せらるゝ方もあらう、此等の兄弟に向て予は何も教を垂るゝ資格のないものである。予が今語らんと欲する所は、予は斯くの如き生涯を送れり」と云ふのではなく、信者は斯くの如き生涯を送るべしと云ふのである。予自身も諸君と共に、此理想に適合せんことを祈る次第である。

二、信者の信仰とは如何なるものか

一。信者は無論キリストを信ずる。キリストを信ずるものをクリス

チアンと稱して居る。即ち基督者と譯するのであるが、諸君も予もクリスチアンである。キリストを信ずるとは、キリストの教へ給ふた事となし給ふた事を信ずるのである。何を教へ給ふたかと言ふと、第一天の父を我等に示し給ふた、キリストの教に依て天の父即ち眞の神が我等を愛し、又我等を護り給ふたが分る、信者は之を信するのである。第二に自身を教へ給ふた、其教に依てキリストは天の父より遣はされた救主である」と云ふことが分る、信者は之を信するのである。第三には聖靈を教へ給ふた、聖靈は弱き人間を助けて正しき道に導き給ふと云ふ事を知り且つ信ずるのが信者である。

二。キリストの教へ給ふた事となし給ふた事は一致して居る。キリストはかく教へ給ふたのみでなく自ら行ひ給ふた事がこれと一致して居る、口には教へて身には行ひ兼ねる人が多いが、キリストはさうでない。

二、信者の信仰とは如何なるものか

三

キリストは愛の生涯を送つて愛を教へ給ふた、犠牲の生涯を送つて犠牲を教へ給ふた。自ら神なりと云つて眞に神なるべき行をなし給ふた、自ら王なりと云つて眞に靈の王なるべき行をなし給ふた、自ら世の救主なることを告げて眞に世を救ひ給ふたのである。信者は贖罪の意味を解し得て居るものもあらう、又解し得ないものもあらう、しかしづれもキリストに依つて罪の赦を信じて居る。神の存在を證明し得るものもあらう、證明し得ないものもあらう、しかしみな神の存在を信じて疑はない。信者は悉く神學者ではないが、悉く信仰者である。諸君と予とは聖書の或事柄に關しては説明の方法を異にして居るかも知れぬが、同じく神とキリストを信じて居る、信者の主要事件は此信仰である。

三。キリストは眞の信仰を要求し給ふた。キリストが教へ給ふたのも行ひ給ふたのも、人をして眞に信仰せしめんが爲であつた、醫し給ふた

のも、恵み給ふたのも、人の眞の信仰に基つて居る。唯キリストの力を信じて其性格と靈の目的を認め得ぬ者はキリストの弟子となるべき眞の信仰でないとし給ふた。キリストが逾越節にエルサレムに在しに、多の人等、キリストの行ひ給ひし休徴を見て其名を信じたが、キリストは自己を彼等に托せ給はざりしと書てある(約三〇、四)。曾て王の大臣が我子の病を療れんが爲にキリストに來りし時、キリストは大臣に對て「爾曹休徴と異能を見ずば信せじ」と云つて喜び給はなかつた(約四九)。キリストの力を信ずるとも可なりであるが眞の信仰の目的はキリストの性質である。假令キリストが一の奇跡を行ひ給はざりしとするも、キリストに對する信仰は動くべきでないのである。又口計りにて主よ主よと云つても盡く天國に入るものでない、唯これに入る者は我天に在す父の旨に遵ふ者のみなりと教へ給ふた(太七〇)。口の信者は眞の信者でない、心にもない

祈りをなして主の名を唱へ、自分に何の信念もないのに信者振るのは、眞の信者でなくて偽信者である。諸君も予も信者として世に立つからには、天に在ます神の旨に適ふものとならんことを心懸けねばならぬ。

四。信仰は理解力の働きである。假令神學者とはならずとも己に與へられた理解力の働きの得るだけは、何を信するか、何故に信するかを知らねばならぬ。然らずんば誤信に陥り易い、迷信に流れ易い。さらば云つて何も彼も自ら新に考へ出せと云ふのではない、吾々は歴史家を信じて歴史の事實を信じて居る、技師と建築師を信じて安穩に家に住で居る、發明家を信じて電気も瓦斯も用ゐて居る。人は皆信仰に依つて世渡をして居るのである、信者の信仰も又斯の如きもので、聖書を信じ、教會を信じ、使徒の教を信じてキリストに對する信仰を養はねばならぬ、専門的學者は別問題として普通の信者に取ては、此覺悟が必要である。信仰は傳へ

られたものである、聖書も信せず、教會も信せず、使徒も信せず、牧師も信せずして自ら勝手な考を起すとは險毒である、誤信に陥り易いのである。

五。信仰には情の働きが伴はねばならぬ。「假令われ預言するの能あり、又すべての奧義と諸の學術に達し、又山を移すほどの諸の信仰ありと雖も、若し愛なくば數るに足らぬものなり」(哥前三)とある。智識上の信仰は如何程ありても、愛が伴はなければ力なき信仰である。親を親として信する計りにて、親として愛するなくんば、親に孝なる者とは云はれぬ、君を君として信しても君として愛するの念なくんば、君に忠なるものとは申されまい。神を信するなら神を愛せねばならぬ、キリストを信するならキリストを愛せねばならぬ。惡魔はキリストを神の子なりと信じたが、神の子として愛さなかつた、惡魔的の信仰は眞の信仰でない、必竟するに理解力は人に確信を與ふるものである、而して情の力は其確

信に熱心を加ふるのである。

六。信仰には又行の伴ふことが必要である。此點に就てはヤコブが詳しく述べて居る曰く「わが兄弟よ、人自ら信仰ありと言て若し行なくば何の益あらん乎、その信仰いかで彼を救ひ得んや、もし兄弟あるひは姉妹裸體にて日用の糧に乏からんに、爾曹のうち或人これに曰て、安然にして往け願くは爾曹温かにして飽ことを得よと、而して其身體に無てならぬ物を之に予へずば何の益あらん乎、此の如く信仰もし行を兼ざるときは乃ち死るなり。或人いはん、爾信仰あり、我行あり、請なんちが行を兼ざる信仰を我に示せ、我は我が行に由て我信仰を爾に示さんと、なんち神は惟一なりと信ず、如此信ずるは善し、惡鬼も亦信じて戰慄り、あゝ愚なる人よ、行を兼ざる信仰の死ることを爾知んと欲ふや、我儕の先祖アブラハムその子イサクを壇の上に獻て義とせられたるは行に由るに非ずや、その

信仰行と共に働き、且行に由て信仰全備を得たるを爾見るべし。」とある。信と行との關係を述べ得て盡せりである。

七。信仰は又永續することが必要である。普通人と人との間に行はるゝ信用でも同一であつて忽ちにして信用し、又忽ちにして不信用を與ふる如きことあらば、何の仕事も出來ないのである。唯世の中の事信用せらるべき人が己の性格を變じて不信用を來たらす場合が多くある、此場合には信用する人の立場は變せざるが信用せらるゝ人の立場が變ずるからであつて、止むを得ないのである。若し信用せらるべき人の性格も働き振りも變せざるに信用する人が自己の理由に依て其人を信せざることにならば、其罪は信用する人に歸せねばならぬ。神とキリストは變らないのである、之を信じたり、信じなくなつたりすることは人の罪である。昨日は熱心なる信者であつたものが今日は天理教に固まり、或は

二、信者の信仰とは如何なるものか

冷淡なる無宗教家となり、或は基督教に向て却て攻撃の態度を取る如きは甚だ見苦しき次第である。キリストの播種の譬の中にある稊地に播れたる種は此種の人を指したのであらう。即ち「教を聴て速かに喜び受れども己に根なければ暫時のみ、教の爲に患難あるひは迫らるゝ事起る時は忽ち道に礙く者なり」(太五十三)とある。深き根拠を造らざる信仰は輕信である、又虚信である。

八。信者の眞の信仰は愛と行を兼ねたる永續的の確信でなければならぬ。信仰も其正路を失うるときは妄信となり、迷信となり、誤信となり、偏信となり、輕信となり、虚信となり、僞信となる。妄信とは思慮を缺きたる信仰である、迷信とは信すべからざることを信する信仰である、誤信とは信仰の目的を誤り取り違へたる信仰である、偏信とは統一を缺ける信仰である、輕信とは理解力を缺ける信仰である、虚信とは心に何の蓄へもなき信仰である、僞信とは僞信者の信仰である。吾々信者は此等の横道に入らぬ様注意せねばならぬ。

三、信者の心理状態は如何なるものか

諸君諸君は信者となつてより、其以前と何か異つた所があるであらう。其異つた所とは何であるか。未信者であつたときと、信者になつてからと、其間に實際どんな變化を來たしたか、又どんな變化を來たすべきか。此事に就て諸君に書き送りたいと思ふ。世間にあの人は信者になつてから温順になつたとか、勤勉家になつたとか、行儀が正しくなつたとか、顔色がよくなつたとか、又は病苦が去つたとか云ふ人が多くある。如何にも是等の結果を生ずるに相違ないが、然し是等は矢張り結果である。此結果を來たす原因がある、即ち心の状態である。心の状態が變すれば、自

三、信者の心理状態は如何なるものか

然と姿勢も容貌も又動作も變じて來るのである。そこで信者となつた爲に心の状態は如何に變化すべきか吾々の心は其變化すべき通りに實際變化して居るか諸君に述べたいのは此所である。

一。信者は信者なりとの自覺心があるべきである。信者であるに標榜しながら實際自分で眞の信者であるや否を疑ふ様では眞の信者でない。前に述べた偽信者や虚信者は自ら信者であると云ふ觀念を有せずして信者であると告白して居るものである。自分はキリストを信じて居ると云ふ信念は信者たるの要素である。然しながら此信念には謙遜の意識も含まれて居らねばならぬ自分の信念を以て完全無缺であると思つては間違ひである。信念は複雑なる心理的現象である。信念の智的方面には淺深がある。情的方面には冷熱がある。意的方面には強弱がある。信念は信念であつても斯くの如き差異があるとすれば自

分の信念がまだ淺くて冷かで弱きものであると自覺することは信者として當然の事である。此感じがあればこそ信仰上の修養をする氣にもなる。主よ我信ず我信なきを助け給へと祈る心にもなる。信念は進歩的のものである。信念より信念にと進み行くのである。故に信念の自覺には又謙遜の自覺も含まれて居るのである。

二。信者は罪人なりとの自覺心があるべきである。キリストを信ぜざるものは罪人であるが、キリストを信するものは罪より救はれたもの故に、最早罪人でないと思ふことは誤りである。我々は毎日懺悔して「我らは亡へる羊の如く父の途を離れ多く己の計と慾に従ひ主の聖き律法を犯し爲すべきことを爲さず爲すべからざることを爲し全き所あることなし」と告白するのは罪人なる自覺に外ならないのである。故に「罪に煩悶める者を憐みたまへ」と祈るのである。リタニの始めにも「我

等罪人を憐みたまへ」と云ふ大齋懺悔の特權は殊に此思想に充ちて居る。信者になつたから聖き人に化した如く感ずるのはパリサイ的の感じである。學者になればなるほど自己の無學を感ずる如く、信仰の生涯に進めば進むほど自分の聖からざることを感ずるのである。信者は自分の生涯と他人の生涯と比較して我聖きに誇らんよりも神の性質に比較して我聖からざることを懺悔するのである。道徳的生涯の進歩するのは之が爲である。

三。信者は救はれたとの自覺を有すべきである。過去に犯し來つた罪は、自分の悔改と神の恩寵に依て赦されたとの自覺があるべきである。罰が恐ろしいから起つたのでは眞の悔改でない、かくの如き人に罰がなかつたならば悔改めをせぬかも知れん、罪を繼續するかも知れん、眞の悔改めはかくの如きものではない。罰があらうがあるまいが、之は悔改

の條件ではない、是迄の我性行は神の聖旨に背いた事である、神の榮光を破つたことであると深く感じて、神の恩寵に信頼して其赦を願ふのである。又此願ひが必ず聽かるゝと信せねばならぬ。罪が赦されたと信するほど安心な事はない。一たび罪の自覺が人の心に起るときは、過去の自己に對して新たな悔る心を來たすと同時に、現在と未來の自己に對して新たな注意と決心を來たすのである。自己の罪を自覺すると共に、神の恩寵をも自覺する、神の恩寵を自覺すると共に、罪の赦しを自覺する。安心と喜樂は從て其人に添ひ來るのである。

四。信者の生涯は究屈でなくて自由である。俗界の人から眺むると、信者は如何にも究屈さうに見ゆる、常に鹿爪らしく見ゆる、寛げて樂しむと云ふことも少いやうに見ゆる處が、信者自身に取つては頗る自由である。所謂惡魔の壓迫を脱して良心の自由を得ると云ふ事は頗る愉快で

ある。政治上の束縛は不愉快ではあるが堪へられぬことはない。社會の制裁も随分苦しいが、されども我慢の出來ぬことはない。況んや政治上の束縛社會の制裁がそれ相當の理由ある場合には、自分には不自由であつても、左程の苦痛を感ぜぬのである。然るに己れの良心より來る呵責は最も慘酷であつて、細末も容赦せぬのである。此呵責の爲に狂氣になるものもあれば、自殺するものさへある。信者は此最も峻嚴なる呵責より脱して居る。此自由は信者の特權であると思ふべきである。固より前に云つた通り、信者と云ふて完全無缺の品格を備へて居る譯ではない。然し常に良心の責なからんことを努力して居る。此努力の多いだけそれだけ、自由も多いと云はねばならぬ。

五。信者には天職の觀念が深くあるべきである。信者は如何なる職業にあつても、此職業は神の召を蒙てやつて居ると信じて居る。神の榮を

顯はす爲に與へられた事業だと信じて居る。即ち我天職だと信じて居る。此信仰は偉大な力である。人には何等かの事業が與へられて居る。徒食は神の聖旨でない。人は働くべく造られて居る。働くべく造られて居ながら働かないのは、人に生れ來つた目的に背くのである。かく信じて居るから、何等かの事業に必ず就くべきものと信じて居る。其事業は何たるを問はず神の事業であるゆゑに皆神聖である。役人も神聖である。實業も神聖である。勞働も神聖である。或る勞働は人の前には賤しきものとせらるゝが、神の前には賤しくない。神の前に正しからざる仕事もある。これは人の企てた仕事であつて、神の命じ給ふた仕事でない。神の與へ給ふた事業には正しからざるものもなければ、賤しきものもないのである。

六。信者は常に天父の前にあると信じて居る。傭はれ人が傭主の面前にて仕事をすると、見えない處にて仕事をすると、其働き工合に差異

がある。備主が見ると見ざるに拘らず、眞面目に働くものは餘程の人である。子は親の前に於て最も孝行者である。臣民は君主の前に於て最も忠義である。婢僕は主人の前に於て最も忠實である。兵士は將校の前に於て最も勇敢である。學生は監督者の前に於て最も勤勉である。此等權威者の見えない處に於ても同一の義務を盡すべきことは、皆知つて居る。然し實際に於て同一の義務を盡さぬのが普通である。兎に角人が他の人の前に立つと何等かの力を分取する如く感するのである。權力ある人の前に立てば何となく其威力が自分の頭を抑へる様に感ずる。徳ある人の前に立てば又何となく其徳の感化を受るのである。其前を去るときは、其威力にも遠かりて自分の心に緩みが來る。從て又色々な間違も出來易い。信者は何時にても何處にても神の前を去らぬと信じて居る。故に眞の信者であるならば、心に緩みが來て見苦し

き事を仕出來すことではない筈である。信仰の淺深に依りて神の前にあると云ふ觀念に強弱がある、其強弱に依りて信者の生涯が様々と變化するものである。

七。信者は天祐を心から信すべきである。子供が父の前にて游泳の稽古をすると假定せよ、子供が自分の呼吸の續く限り、自分の手足の動く限りは務むるのである。務めて居る間は父は手を出さぬ。しかし寸時も目を外さぬ。いよく危険と見ゆる瞬間に父は之を救ひ上げる機會を失はぬ。信者が神の助に依り頼むとは此意味である。自ら務めずして神の助に依頼せんとするも、神は之を助け給はぬ。助け給はぬこそ其人の爲である。力盡きて最後の場合には神は見捨て給はぬ、天は自ら助くるものを助くとは、此事を云ふのである。然れども神の助があるべき筈と思ふときに助けが下らぬこともあらう。神は人の思ふ如くに思ひ

四、如何に未信者に對すべきか

給はぬ。其場合には人には分らぬが神に理由がある。助を與へぬことが其人の爲或は社會の爲によいと思ひ給ふからでもあらう。

八。信者の心は嚴格に其愛を以て本體とすべきである、神を愛し、人を愛し、動物をも愛すべきである。信者はキリストの意を以て意とすべきことは皆承知して居る所である。キリストは愛の發現である、其言ふ所行ふ所皆愛に基いて居つた、信者は之れに倣ふて愛の人とならねばならぬ、此愛が他に向つて如何に働くべきかは追々に述ぶるであらう。

四、如何に未信者に對すべきか

一。未信者とは如何なる人を指すか。信徒の數を約二十萬人としても人口の二百五十分の一である、未信者二百五十人に對して信者一人の割合である。數から云へば實に心細き次第であるが、決して失望には及

ばぬ、芥種の如き又パン種の如き信徒の團體は段々と大くなる運命を有して居る、手は信者でない人を不信者と云はずして殊更に未信者と云つた、今ではまだ信者でないが、早晚皆信者となると信じて居るからである。基督教は地方的宗教でなく、人種的宗教でなく、又時代の宗教でなく、人類的宗教であるゆゑに、一度は人類皆信者となるべく、世界悉く基督教國と變すべく信じて居る。斯くの如き新天地新人類が何時發現せらるべきかは分らぬ、昔し使徒時代には直ちに此新現象が來るやうに考へた人も多くあつたが、それは間違であつた。何時來るかは分らぬが、一度は必ず來る、是れが我々の信仰である。故に人類中まだ信徒ならざる人々を指して未信者、即ち後には信者となるに相違ないが、今日ではまだ信せぬものであると云ふのである。世の中に到底見込みのない人と云ふことはないやうに思はるゝ、人にはなし能はぬでも、神にはなし能ふと信じて居

る。
二。基督教反對者とは如何なる種類の人であるか。色々ある。基督教は國家の道德に背くかの如く信じて居るものがある。昔ソクラテスと云ふ哲學者がギリシヤのアデンに於て新思想を鼓吹し始めたとき、時の人々は新らしき神をギリシヤに輸入し青年を腐敗せしむるものだと騒ぎ立て、終に彼を毒殺した。キリストが道を始め給ふや、カイザルに背くものだ、神を潰すものだと騒ぎ立て、彼を磔殺した。今日の信徒も類似の迫害を受けて居る。毒殺や磔殺は免かれて居るが、随分無理な攻撃を受けて居る。今日日本にはパリサイ宗の人もあれば頑固なる學者や祭司もある。小部分ではあるが、矢張此等が未信者の一部分を占めて居る。或は哲學や科學の教ふる所に衝突するかの如く思つて居る人もある。或は佛教を根據とし、儒教を本城として、基督教に反對するものもある。

然るに又他の種類の反對者がある。自ら反對すべき理由を知らずして反對する人がある。何とも云へないが耶穌教はいやである、虫が嫌ひである、食すに嫌ひである。成るべく信者と交らぬやうにして居る。教會には無論行く氣にならぬ。政治的の意味に於て反對するものは、又政治的に攻撃する、智識の上から反對するものは理論的に攻撃する。感情の上から反對するものは唯無暗に感情的に攻撃する。いづれにしても此等の人々は正面から反對する者であつて眞の反對者と思ふべきである。
三。反對せざる未信者とは如何なる人か。此種類の人は割合に多い。眞に反對する人よりも此種の人が多いやうに思はる。基督教を以て善いとも思はぬが惡しとも思はぬ人がある。研究して善か惡か判断しやうとも思はぬ。云は、頗る冷淡である。宗教問題に對して一片の注意をも拂はぬのである。故に人の信するのを妨害はせぬが、自ら信じやうと

は更に思はぬ。此種類の人が随分多い。次には基督教を善い教であるとは思つて居るが自ら進んで信者とは成りたくない人が随分ある。此中には自分は宗教に依らないでも人間一人前の道は守つて居ると濟して居るものもある。或は自分の弱點も罪惡も自覺して居るが信者となるに餘りに究屈である。世間の交りも成し難くなると云つて躊躇して居る人もある。此種類の人は妻や子供が教會に行くことは却て喜ぶが自らは可成敬遠主義を取て居る。次に教會の教義は深く研究せぬが教會の事業は高尚である愉快であると思つて、あらゆる教會事業に助力を與ふる人がある。矯風事業や教育事業、其他あらゆる社會的事業に對して力も副へるし、金も出す、俗に云ふ基督教賛成者である、賛成はするが然し未信者である。キリストに對して信仰がある譯ではない、其事業に賛成して之れに協力するのみである。次には信じたくて信仰が起らぬ人があ

る、是等は眞面目な求道者である、聖書研究會にも出席する、教會の禮拜式にも出席する、智識の上に於ては全く信じて居つて、然かも信仰と稱ふる熱き信念が起らぬから、自ら信者と云はるゝを恥づる人がある。斯の如く未信者の種類を分析すれば、

- 一、反對すべき理由ありと信じて反對する人。
 - 二、反對すべき理由を有せずして反對する人。
 - 三、反對せずして然かも信せざる人。
 - 四、善き宗教なる事を知りて尙ほ信せざる人。
 - 五、教會の事業に賛同協力して然かも自ら信者とならざる人。
 - 六、信せんことを希望して未だ信する能はざる人。
- の六種である。

四。信者は此等の未信者にキリストを教ふる義務がある。右に列擧

した未信者は我々の親戚朋友の間にもあらう、我々の隣や向ひにもあらう、或は親しく交つて居なくとも、接近し得らるゝ人々の中にもあらう。兎に角二百五十人と云ふ大勢の未信者が我々の一人一人を取巻いて居るのである。是等の人々に對して信者たる我々はキリストを教ふる義務がある。傳道と云ふことは牧師や傳道師に一任して置くべき事でない、信者一般に命せられた事業である。假令他より命令を受けぬとしても眞の信者であれば、己れの信仰を他にも勧めたいと云ふ希望がある筈である。世の事なれば自分の資を人に遣る必要はないが、福音の事柄は別種の論理を有して居る。人に之を興へて自分は益々有福となる世のものは人に興ふれば、それだけ自分に無くなるが、靈のものは人に興ふだけ、それだけ自分に多くなる。傳道する人は信仰が益して來る隣を愛する人は己の愛情が益々發達する、是れ精神界の原則である。故に傳道

することは常に其人の爲のみならず、又自分の爲である。個人に於て然るのみでない、教會に於ても同様である、傳道心の燃えて居る教會は何となく活氣がある。生き〜として居る。

五。如何に傳道すべきか。前に述べた通り、未信者の種類も色々ある。又我々信者の種類も色々ある。故に一概に斯く傳道すべしとは申されぬ。我々信者の中にも恩賜がそれ〜異つて居る、言語に巧みなものもあれば、筆に達者なものもある。或は言ふことも書くことも不調法であるが、親切に働くことは長所である人もある。先方が多少教育あるならば、予が曩に著した『求道者に興ふる書』と『未信者に興ふる書』を參考せられたい、多少諸君の助けとなるであらうと自信して居る。然し理屈詰めで他人に傳道することは諸ての人に興へられた恩賜でない、女にも、子供にも、無學なものにも、信者である以上は傳道の義務を有すとす

四、如何に未信者に對すべきか

れば、理屈以外の傳道法があるのである。左の三ヶ條は特に諸君の参考になるであらうと思ふ。

一、自分が眞面目な生涯を送くると。是れが他人に傳道する大なる力である。「汝等の善き行を見て天に在す汝等の父をあがむべし」(六〇十)とキリストが云はれたが此事である。即ち役人は忠實に其職務を遂行する、商買人は勤勉に其事業を經營する、學生は眞面目に自分の學課を勉強する、かくすれば信者として其靈の現はれざる筈はないのである。

二人を基督教的集會に誘引すること。誰にも出來得る事である、妻君は他の妻君を婦人會に導き、子供は他の子供を日曜學校に伴ひ、青年は他の青年を聖書研究會に誘ひ、機會があれば誰彼の別なく教會に案内する事である、是れが普通信徒の傳道法である。自分で説教は

出來ずとも、牧師の説教を聞かしむる様にする事は誰でも出來るのである。

三、未信者の爲に祈ること。未信者が信者となる様に神に祈ることは力ある傳道である、甲の祈りに依て乙に恩寵が來りしことは聖書に記されてある。未信者は諸君の言論には反對する力があつても、神に反抗する力はない、故に神の祐助に依りて未信者を導くことを心懸けて置かねばならぬ。

六、未信者は我々信者の兄弟姉妹であること、を忘れてはならぬ。信者同志は常に兄弟姉妹と唱へて居るが、未信者に對しては其感心が薄いものがある。それはよろしくない、人類は信者であらうと未信者であらふと均しく神の子である、故に人間相互は其親を知ると知らざるとに拘らず互に兄弟であり、姉妹である。未信者からは信者を兄弟とも姉妹と

四、如何に未信者に對すべきか

も思つてないかも知れん然し信者からは彼等を近き親戚と思ふべきである。不幸の子は親を親と思はぬが愛に深き親は子を子として心を痛めて居る。信者相互は一家の内に仲よく暮して居る兄弟姉妹であるが、未信者は家を出て、迷ふて居る兄弟姉妹である。兄が悪人となれば弟は心配する、妹が墮落すれば姉は胸を痛める、憎いからではない、愛するからである。

七。未信者の親戚に對しては殊に親切が必要である。未信者が親戚であるならば、猶更である、自分が信者となつた爲に親戚から迫害せられ、或は絶縁せらるゝ場合もある。かゝる場合には止むを得ない、其爲に自分の信仰を棄つる譯には行かぬ、しかし充分に親戚に親切を盡し、力のあらん限り好意を表したらんには、如何に頑固な親戚でも多くの場合には其親切に負けるのである。自分は神の子である、汝は悪魔の子である。

云はん許りの態度を以て之れに對ふゆゑに、人の感情を害する事が多い、嫁が親切に姑に事へ、子が誠意を以て親の爲に盡すときは、如何に邪見な未信者でも心を柔ぐるに至るであらう。自分が信者である爲に、家族親族に不和を生じたらんには、先づ自分の信仰の足ないこと、愛情のまだ充分ならざる事を顧みて、熱心に又忍耐して、自らも修養し、他にも事ふる心懸けが肝要である。悪魔だの、迫害だのと云つて直に反抗の態度を取ることは信者のなすべき事ではない。

八。未信者の他人に對しても親切が大事である。世には愛より強いものはない、知り合ひの人であるならば、猶更愛を以て交はらなくてはならぬ、病氣であるならば直に見舞に行くことを忘れてはならぬ、不遇災難に罹つた場合も同様である。産のお話もするがよい、子供の面倒も見るがよい、轉宅の手傳でも、吉凶の場合に於けるお話でも、事情の許す限りはず

る決心が必要である、此等の助けをなすことはキリストに對して奉仕する所以である、聖書に其通りに記されてある。知り合ひの人でないでも、機會あらば親切にせんければならぬ、サマリア人の譬(五路十廿七)は此道理を説明したものである。時として如何に親切を盡しても更に其恩に感せぬ人もあるが、其爲に最早親切にする必要はないと思ふのは間違である、返禮を受けん爲に親切を盡すならば眞の親切でない、世には随分恩に報ゆるに仇を以てするものもあるが、これは固より善くない事である、然し恩を施した人が之れに對して不平を云ふとも亦よくない事である。

五、如何に信者に對すべきか

一。信者はイエスキリストにありて一つである。パウロがガラテア人に書き送つた書翰中に「凡そバプテスマを受てキリストに入る爾曹

はキリストを衣たるもの』である(廿三〇)而して「斯る者の中にはユダヤ人、またギリシヤ人、或は奴隸、或は自主、或は男、或は女の分なし、蓋なんちら皆キリストイエスに在て一なれば也」(廿八〇)と云つて居る。即ち社會の身分は如何に異つて居つても、又男女の別はあつても、皆同一の信仰を有するものなれば、キリストにあつて一である。故にパウロは又エペソの信者に勸むるに「なんちら召れし召に符て行はんことを悉く謙遜と柔和と寛容なる心を以て行ひ、愛を以て互に忍び、平和といふ繋の中に務めて靈の賜ふ所の一なるを守るべし、體は一、靈は一なり、爾曹の召れて有つ所の望の一なるが如し、主一、信仰一、バプテスマ一、神即ち萬人の父一なり」(弗四〇)と述べた同一の心を以て同一の神を信じ、同一の希望を有し、同一の訓戒を奉じて居る故に、信者が信者たる間は心に於て相互に一でなければならぬ。

二。信者はキリストの體に屬するものにして各其肢の務をなすものである。パウロは前に述べた以弗所書に『われら各人にキリストの賜ふ所の量に循ひて恩を賜ふなり』(七四〇)と云ひ尙進んで『その賜ひし所は使徒あり預言者あり傳道者あり牧師あり』(四一〇)と云ひ又『キリストを本とし全體すべての百節の助によりて聯結鞏固その肢體おのゝ分量に循ひ方行て其體を育てみづから愛に由て徳を建るなり』(四六〇)と云つて居る。パウロの主張する所は信徒の團體はキリストに於て一となるべきであるが其一となるうちに又各異つて居ることを認めねばならぬ恰かも人體の如きものであつて四肢各特殊の働を有して居る。其四肢が適當の働をなして體の全部が健全に成長するのである。キリストは又此道理を葡萄の樹に依て説明し給ふた、『我は眞の葡萄樹わが父は農夫なり我に在て凡て實を結ざる枝は父これを剪除すべて實をむす

ぶ枝は之を潔む蓋ますく繁く實を結ばしめん爲なり』(約一五)『枝もし葡萄樹に連らざれば自ら實を結ぶこと能ず爾曹も我に連らざれば亦此の如ならん』(約四五)斯く述べ給ふた葡萄の枝は各異つて居る。其枝振りよ云ひ葉の持ち方よ云ひ各特色がある同じ様な枝であらねばならぬとはキリストは云ひ給はなかつたしかし皆キリストに連つて居ることが必要なのである。信者の中には官吏もあらう實業家もあらう教育家もあらう又其性質に於ても或は事務の才に長じたものもあり或は手先の器用なものもあり或は何事に就け注意深い人もあり或は色々計畫を立てるに巧みなものもある年齢から云つても老ひたるものあれば若いものもあらう教育のある人もあれば教育のない人もあらう子持ちもあれば子なしもあらう下女三人も使つて豊かに暮らして居るもあれば妻君が下女兼帯に働いて居るものもある。此等の異同はキリストの體に屬し

又キリストの幹に連なるに何の妨げともならぬ相互の異なる所を認むると同時に、又相互に同じき所をも認めねばならぬ。

三。信者は相互に異なる所を尊重せねばならぬ。哥林多前書第十章に「一體は一肢のみに非らず多くあり、足もし我手に非らざるが故に體に屬せずと云ば、夫に因て體に屬せざる乎、また耳もし我目に非ざるが故に體に屬せずと云は、夫によりて體に屬せざるか、もし全身目ならば聞くところは安ぞや、若し全身耳ならば嗅ぐところは安ぞや、それ神は心のまゝに肢をおのゝ體に置たまへり、若みな一の肢ならば體は安ぞや、肢は多あれども體は一なり、目は手に我なんちに用なしと謂を得ず、又頭も足に我なんちに用なしと謂を得ず、體のうち尤も柔しと見ゆる肢は却て無るべからざる者なり、體のうち尊からずと意ふ所に物を纏て我儕殊に之を尊ぶ、之に因て我儕の不美ところは愈て美しく爲なり、我儕の美し

き所は心を用ゆるに及ばず、神は其劣れる所に殊に尊貴を加て體を調和たまへり、これ體のうち分事なく諸の肢たがひに相顧み扶けん爲なり、もし一の肢くるしまば諸の肢ともに苦しみ、一の肢たふとばれば諸の肢ともに喜ぶなり、爾曹はキリストの體にして亦おのゝ其肢なり、二十四七と、かくパウロは云つて居る趣意明瞭である。相互に異なる點を認むるのみならず、互に之を尊重せねばならぬ。信者の中によくない事があるならば、無論之を正す事に注意せんければならぬが、よくない事と断定するまでには餘程の熟慮を要するのである。

四。信者は相互に徳を建つる事に心懸けねばならぬ。未信者相互の間よりも信者相互の間の方が批評が多いと云ふ人がある。さう云ふ事はない筈であるが、しかし是れは事實であるかとも思はるゝ、全體未信者

よりも道徳觀念が發達して居る、道徳上の理想が高い、故に理非曲直を判定する標準が明白であり、又嚴格である、故に普通の社會では頓着せぬ事柄でも信者は之を非難する場合がある、未信者の仲間では何とも思はぬ事を信者は之を等閑に附せない、自らの罪を感ずることの深い如く他人の罪を見ることも酷である。故に信者は自然に他を批評することが多い、又批評することが眞面目である。然るに批評は終に惡口に變はることがある、人の罪を悲んで自分が又罪に陥る、婦人會でも男子會でも、祈禱をして居る間は眞面目に自分の缺點を考へて居るが、雑談に移ると人の噂が始まる、信者が相互に慎まねばならぬ所は此である。人の批評をするに當り、これが果して其人の徳を立つることであるか否かは、各我良心に問へば分かる事である。信者の間には決して嫉妬や猜忌や嫌惡の念が侵入しては宜しくない、心から他の信者を愛するものならば、惡口を云

つても惡口にはなるまいが、第一に惡口を云はぬであらう、信者に對して、或は信者の事に關して何か云ふことがあるならば、それが其人の徳を立つることであらうか、ごうかを始めに考へねばならぬ。

五。兄弟姉妹とは靈の意味にて云ふのである。信者が相互に兄弟姉妹の交りをなして睦しく双方の徳を立つるは如何にも麗はしき極みである。信仰を共にするものは隔意なく交ることが當然であるが、此處にも注意せねばならぬ事がある。信者となつたとして從來の家族關係を脱した譯ではない、又從來の家風を必ずしも破壊する必要はない、キリストの教に背くことがあれば兎も角も、さなくば一層家庭を重んじ、家族親戚を大事にする筈である。信者相互は一の天父を信じて居るゆゑに相互に兄弟姉妹であるに相違ないが、是れは信仰上の關係であつて、血肉の關係ではない、日本の習慣には西洋よりも一層男女の別ありて、餘りに馴れ

馴れしくしないのであるが、若い信者が兄弟の姉妹の云つて交際を馴れしくし、手紙の遣り取りをする如きは、其實何の疚しい處はないにしても甚だ宜しくない。此る傾向を憂ひて良家が其子女を信者にすることを忌むものがある、或る未信者の學校長が學生を教會に行かしむるは宜しからずと文部省に言つたことがある、宗教が悪いからではない、學生が早熟して女と交ることを喜ぶに至るからである、云ふ理由であつたさうである。或る信者の女先生が其女生徒を教會の集會に出すことを拒んだ話も知つて居る、矢張り同様の理由であつた。教會に關係ある善き人々は概して貞操が正しい、失敗も少いと信じて居るが、世間では非常に危険に思つて男女間の交際は一層厳しかつた方がよろしい、其爲に靈の交を破るのでないのである。世間の人の心配する事も大に傾聽する必要がある。

六。信者の交は普通社交の模範とならねばならぬ。喜憂哀樂を共にすることは、交際の通義である、信者の交誼は猶更之を重んずべきである。事があれば訪ふて共に喜び、悲しい事があれば又訪ふて同情を表すべきである。自ら訪ふことが出来ねば、手紙にて慶弔の意を表するも宜しい。別段喜び事も悲しみ事もないとしても、時々訪問することは信者の交り厚ふする所以であらう。然し社會の事業に忙しい人は中々社交的の訪問に出掛くる餘暇がない、又妻女とても容易に外出の出来ない人もある、殊に子供の多い家庭などでは、中々出がたいのである。家の事情も色々であるから、誰は外に出ぬの、誰は家を構はぬのを批評することは出来ぬ。又他を訪問するにしても、先方の時間も考へねばならぬ、先方の仕事も考へねばならぬ、男子なれば遠慮なく自分の都合を云ふ勇氣もあれど、婦人は遠慮勝ちであつて、來客の爲に非常に不便を感ずる場合もある。

又家にそれ／＼家風がある、座敷に通す所もあれば茶の間に通す所もある、交りの親疎にも依るべけれども、又家の風にも依る、訪問する人が自身の家風通り人にも希望するのは無理な希望である。あの家ではどうの、此家ではどうの、と批評するのは見苦しい、貧家訪問と華族訪問と、同様の方式を取る譯に行かぬ。概して云へば、信者間の訪問は大體に於て普通の社交法に學ぶべきであるが、一層親切にすべきである。客の便宜のみ考へず、主人側の便宜をも考へねばならぬ、後で長座をしましたと挨拶するよりも、始めから長座をせぬ方が宜しいのである。自分は暇でも人は暇でない事もある。一定の規則を設くる譯には行かぬ、常識に従ふより外はない。

七。修養の爲めに集る事も必要である。日本の信者の一の缺點は、信者になると却て聖書を研究することを怠る様になる傾きがある。受洗式を以て卒業式の様に考へて居る、實は卒業式でなく始業式である、洗禮を受けて信者の生涯を始むるのである、信者の生涯の一は聖書を読むことである。近頃家禱會と云ふものが追々盛になつて來たやうである。誠に喜ばしき現象である。宅廻りの聖書研究會或は祈禱會などは大に奨励すべきものである。家の都合に依り、かゝる會合に出席し得られない人もあるべければ、教會の信者を悉く集むることは不可能であるが、都合の出來得る人々にて集まるのは大なる利益である。又青年會、男子俱樂部、婦人會、王女會、其他出來得る丈け多くの會合をなし、境遇と趣味と必要に應じ、其一に出席し得る様な機會を興ふることは、信者をして自身の利益を得せしむるのみでない、又教會の爲に盡さしむるのみでもなく、他の信者に對する義務をも果さしむることになるのである。

六、如何に教會に對すべきか

一。教會とは如何なるものか。日本語にて教會と云へば二つの意味がある。自分は教會員である。と云へば、自分は信徒の組織團體に屬して居るとの意味であらう。自分は教會に行く。と云へば、自分は信徒の禮拜堂に行く。との意味に相違ない。先づ組織團體としての教會とは如何なるものか。是から説明して置かねばならぬ。「聖公會大綱」の第十九條にかく述べてある。

キリストのあらはなる教會は、主を信する人々のあつまりにして、其中にては神の言のみを説き明かし、キリストの定め給ひし所に従ひ、凡て必要なることをなし、正しくサクラメント(聖奠)を施さるゝ所である。之れが教會である。主を信する人々とは主を救主とする信仰を有する人

人である。神の言とは今日我々が有する聖書である。サクラメントとは洗禮と聖餐を指すのである。故に此三特質を有せぬ團體は教會とは云はぬ。何俱樂部とか何會とか云ふものが澤山ありて、其中には宗教的の意味を含んで居るものもあるが、右の三ヶ條の一つでも缺けて居れば、教會とは稱し得られぬのである。主を信するならば、無論聖書を信するであらう。聖書を信するならば、洗禮を受け、聖餐に陪する筈である。故に實の信者であるならば、教會員である筈である。

二。第二の意味に於ける教會、即ち禮拜堂とは如何なる所であるか。禮拜堂、聖別式文に依て、禮拜堂とは如何なる處であるべきか、分る。『普通のこと』に用ゐず、主を拜み、主に事へ、聖語を読み、聖奠を行ひ、感謝祈禱をさし、聖名を以て、聖民を祝するなど、都て聖き事に供へたものである。即ち禮拜堂にては、『洗禮を受け』『按手を受け』『聖餐を領け』『聖

語を讀み或は宣べ傳へ』夫婦の神聖なる縁を結ぶ』所である。禮拜堂は斯くの如きものであるゆゑに堂内に於て茶菓を喫し俗歌を歌ひ雜談をなすことは宜しくない、禮拜堂は禮拜堂であつて演說場でもない、社交場でもなく、音樂會場でもない、此區別を明にする必要がある。

普通に教會と稱するものにも、禮拜堂として聖別せられたものと、聖別せられないものがある。聖別せられないものは、借家借室とか或は學校兼用の場所とかである。この様な場所であれば、野卑な事や亂暴の事でない限りは、使用しても差支はないのである。聖別せられた禮拜堂であるならば、之を神聖なる場所として保存し、他の事に用ゆるのは宜しくない。

三。信者は教會に出席する義務がある。先づ信徒は自ら教會の會員となるのみならず、教會に出席せねばならぬ、殊に日曜日には大概の教會は朝と晩に禮拜式があるから、それには必ず出席すべきものと心得ねばならぬ、路の都合や家の事情にて二度の出席が六ヶ敷ければ、少くとも朝の禮拜式には缺かさぬ様にするのが肝要である。教會に出席しなくなる、と自然と信仰もなくなる。殊更聖餐式には萬事を排して出席し、靈の糧を受くべきである。

教會には日曜日の早晩禱式の外に種々の會合がある。大きな教會になると、殆んど毎日の如く、或る種類の集會がある、禮拜堂に集まることもあれば、附屬の會館或は牧師館に集まることもある。忙しき業務に従事する信者は、日曜日以外の集會に出席することが困難である。是れは止むを得ないのである、事情の許す限りに於て、老人は老人會に、婦人は婦人會に、青年は青年會に出席する様にしたのである、日曜日以外の集會に出席せんために、自分の業務を怠り、或は家の義務を等閑に附する様の事

があつては却て信者の本分を盡して居ないのであるから出席しない方が至當であらう、然し業務や事情を口實として教會に遠かるのは、尙更宜しくない。

四。教會には教會の禮法がある。教會即ち禮拜堂に入ると同時に男子は帽子を脱せねばならぬ、時々自分の席に着くまで帽子を取らぬ人を見受くる、甚だ宜しくない、堂を出づる時も同様である、入口に出るまでは帽子を戴くべからず。又教會に入たら、無言で静かに歩かねばならぬ、知人に對しては目禮すべく聲高らかに談話するは教會内の禮に背くものである、禮拜中に後の人を見るのは不謹慎を意味するのである、説教中に場を出づるときは説教者の氣を悪くするゆゑに退出せねばならぬ必要があれば、説教の前讚美歌の時に静かに退くがよい。祈禱書や讚美歌などを下に置くときは音のせぬ様に置くべし、魚末に投ぐるが如く腰掛の上などに置くのは野人の習ひである。子供同行の婦人で其子供が泣き續く場合には静かに連れ出して席を出づるのが禮である。大人で頻りに咳が出て止まぬ場合も同様である、場がこむ時は互に都合を付くる様に心得べく、日本造の疊座敷などにて入口に座を占め前に進まぬも禮に似て禮にあらずである。集會の時間に後れない様に出席することを注意してほしいのである。教會は社會の模範を示すべきであるから、此點は特に注意する必要がある。教會に入るときも、出づるときも、黙禮するのは出席者のなすべき禮である。

五。禮拜堂は禮拜の場所である。教會に行くのは禮拜の爲に行くのである、説教は其一部であつて全部でない、説教者の説教が面白くないこともあらう、又説教が長過ぎて睡氣を催さしむる事もあらう、説教者の心得に關しては言ふべき事もあるが、是れは別問題である。今は信者が説

教者に對する心得に就て言ふのである。禮拜の爲に出席して居ると云ふ考になれば、説教が少々まづくても辛抱の出来ない筈はない。禮拜中は俗事を考へぬ様に修養せねばならぬ、俗事に氣を取られては眞の禮拜は出来ぬ、平心虚氣となつて神を拜すべきである。祈禱をしても前の人の奇麗な衣服に心を奪はれ、隣りの人の態度に可笑しみを感ずる様では却て自分の罪を造る様なものである。詩篇を誦するも、聖歌を歌ふも敬虔の念より出づべきである、懺悔をするも、祈禱をするも、誠心よりすべきである、前に述べた通り演説場でもなく、又音樂堂でもなく、禮拜堂であるゆゑに、拍手喝采することを禁せられてある。又禮拜式の時は信施を集むることになつて居るゆゑ、教會に行く前に、其用意をして出懸くべきである、金の多寡は問はない、神に捧ぐるものであるゆゑに、をしげなく喜んでさゝぐべきである。

六。信者は教會を維持する義務がある。教會を維持することは信者の義務である、禮拜堂其他教會に屬する建物の修繕、其設備に關する費用、牧師の俸給其他凡て教會に關する事柄の費用は信者が負擔すべきである。教會は信者のものである、我物に對する費用は我負擔であるは當然である。是れが原則である、然し今日の處にてはまた傳道會社の補助に依て維持せらるゝ、教會が多い、我國の教會は尙ほ幼稚であるゆゑに、先覺基督敎國の世話を受くることは止むを得ないのであるが、いつまでも是れでは行かぬ、自分の教會は自分で維持すると云ふことにならねばならぬ、早い程宜しい、贅澤な物や、無用な事に費して居る金錢を節約する事に皆がなつたなら、大概な教會は財政上獨立する事が出来るであらう。役人でも書生でも應分の會費を納むるは信者としての義務である、會計より催促を受けないでも定つた期日にはチャンを納むる様に心得ねばな

らぬ、應分であるから其金額に制限はあるまい、五錢だけ月に納むる學生もあれば、五圓だけ納むる紳士もあるべく、神の前には均しく嘉納せらるるのである。五圓も出し得る人が五錢だけ出し、五錢より以上出し得ないものが借金して五圓も出すことは、共に宜しくないと思ふ。教會は經常費の外にクリスマス、祝會や臨時の慈善費等を要することがある、かかる場合にも應分の寄附をせねばならぬ。自分の誕生日、洗禮、葬式、結婚等の場合には幾分教會の基本金に寄附する習慣を造りたらんには頗る妙であると思ふ。

七。如何に牧師に對すべしや。牧師の事業は献身的の事業であることを信者は知らねばならぬ、又其事業は神聖なる事業であることを認めねばならぬ、又牧師は他に何らの野心もなく、全く神と教會の爲に働いて居るものであることを信せねばならぬ、かく認めかく信じて牧師に信頼

し、又牧師を助くる事になればそれで信者が牧師に對する務は充分である。自分に心配事や面倒な事があつて解決しかぬる時は牧師に相談するがよろしい、教會に行つた場合には一言でも牧師に挨拶して歸る事にしてほしい、牧師の宅を訪ふことも宜しい事である、牧師は信者の訪問者を喜ぶのである、唯牧師は忙しい人であることを忘れてはならぬ、長座して其事務を妨ぐることは禮でない。牧師の妻君に對して牧師同様に種々の事を要求するのは無理である。多く子供を有する妻君などは尙更迷惑である、牧師の妻の本分は貧乏ながら其家を圓滿に又愉快に治めて、主人をして其働を自由になさしむるにある。牧師の妻を補助、牧師の様に思つて色々の事を注文するのは氣の毒である。クリスマスや其他時候には牧師に志だけでも贈物をするは麗はしき習である、物の多少には關係しない、家の周圍に出來た野菜や果物などは至極妙である、夏分

なごは一週間でも牧師に避暑せしむることが出来たら結構である。

八。教會の爲に働かねばならぬ。牧師の力一つで教會が盛になるものではない、信者も共に働かねばならぬ。前に言つた事がある通り、誰でも同様に働かれるものではない、人に依ては日曜日の外には出られぬこともあらう、しかし多くの信者中皆が皆までさうでもない、時間の都合が出来る人も随分ある。牧師の手助けとなつて働くことは教會の爲にもなり、又自分の爲にもなる。信者の活動する教會はいつも活氣がある。日曜學校の事業だけでも多くの人を要する、婦人會、青年會、王女會などにも世話をする人がなければならぬ、教會の附屬事業として料理會、英語會、裁縫會、幼稚園などを有する所がある、無俸給で此等の爲に盡すことは事情の許すかぎり、信者の義務である。結婚式や葬式などあるときは猶更立働かねばならぬ、かくして信者相互の親しき交りも出来るし、又教會の榮

ともなるであらう。

七、如何に神に事ふべきか

一。神に事ふることの第一要件は神を禮拜することである、神を禮拜することには就ては、聖公會の早晚禱文中勸告文に明かに示してある。

我ら夥多の罪を犯したれば、蔽み隠すことなく、眞に悔み、謙遜なる心にて此れを白狀し、父の深き憐恤によりて赦免を求むべし。

父の聖手より受けし大なる恩寵を謝し、聖名を頌め、聖言をきき、身體と靈魂に必要なものを願ふ時には格別に爲すべきことなり。

かく記されてある。左すれば禮拜の中に含んで居る事柄は罪の悔改及び自白、赦罪の祈禱、恩寵の感謝、聖名の頌歌、聖語を聞き、並に身體靈魂に必要なものを願ふことである。

三。罪の悔改と告白。罪の悔改めに關しては既に前に述べて置いた。自分の罪を認めて之を悔ゆることは宗教的生涯の第一着であらう、これがなければ宗教が活きたる働きをするものでない、故に自分の罪を神の前に告白することは禮拜の一部である。「我らは亡へる羊の如く父の途を離れ」て居ること、「多く己の計と慾に従ひ、主の律法を犯し」たること、「爲すべきことを爲さず、爲すべからざることを爲し、全き所あることなき」ことを自覺して之を憐恤ふかき全能の父に告白せねばならぬ、固より全能の神は我等の告白を待て始めて我等の罪を知り給ふ譯ではない、然れども我等の告白を要求し給ふ、懺悔の精神より來る自由の告白は神の喜んで受け給ふ所である。

三。赦罪の祈禱。告白だけでは濟まぬ、赦罪を願ふ精神が無くてはならぬ、赦罪の祈禱は己の罪を自覺したる證明にもなれば、神が己の罪を赦し給ふ力あることを信する證明ともなるのである。信者が己の罪に對する考へは、因果應報と云ふ鐵の如き法律に其結果を任かすのではない、慈愛深き神に其赦を願ふことである。「主キリストイエスをもつて世の人に約し給へる如く、罪に煩悶める者を憐みたまへ、尤を懺悔する者を赦し給へ、痛悔める者を還したまへ」と祈るのが基督教的意識である。

四。恩寵の感謝。感謝も亦禮拜の一である、全能の神、慈悲の父に、我らと萬民に優かなる恩寵を降し給ふことを伏して感謝すべきことは祈禱書にも記されてある、「主は我らを造り、我らを護り、此世のものを與へ、特に主イエスキリストにより世を贖ひて量なき愛を見はし、恩寵を受る法を示し、來世の榮光の希望を懐かしめ」給ふのであるゆゑに、此諸般の恩徳に深く感じ、「唯だ語のみを用ゐず、己を獻げて主に事へ生涯よき行爲を用ゐて主の榮光を發揚す」べきである。是等の感謝は何時にても

なすべき事であるが、特に雨の爲、晴れの爲、飢饉を免かれし爲、外寇内訌の鎮定したる爲、疫病の退きし爲、出産の爲、病氣平癒の爲、航海無難の爲には其都度神の恩寵を感謝すべきである。

五。聖名の頌歌 神の聖名を頌め、從て其榮光を讚美することは禮拜に缺くべからざる事にして、且又禮拜を引き立たしむる事にもなるのである。讚美頌や萬物頌又はザカリアの頌、マリヤの頌、シメオンの頌の如きは萬國の語に譯されて、萬國の人々に誦せられて居る詩篇の詩も同様である。聖歌集又は讚美歌の中には祈禱の歌も多くあるが、單に聖名聖榮を頌するものも亦多くある。此等の詩や歌は元來音樂的のものであるゆるに巧妙なる樂器に和して巧妙なる音聲を聞くときは、身も魂も天に登るが如き感じがする、音樂が禮拜を助くるのは是れが爲である。

六。聖言を聴くこと 説教は禮拜の一部であつて全部でない事は前にも述べたのである。實は説教がなくとも禮拜は成り立つのである、下手な説教は較もすれば禮拜を破ることすらなきにしもあらずである。聖公會の日課には舊約書を一年に一回讀み終り、新約は二回讀み終り、詩篇は月に一回讀み終ることになつて居る、聖書を上手に讀む人は説教を上手にする人よりも強き説教をして居る、聖書の朗讀に耳を傾けて其聖語を味ふことは、禮拜席上に於ける信者の最も注意すべき事である。

七。身體と靈魂に必要なものを願ふこと 罪の赦しを願ふことは常になすべきことである、特殊の場合に特殊の祈禱をなし、又特殊の事の爲に祈禱することも心得て居なければならぬ、毎日曜日の特禱は此目的を以て制定せられてある、自分の爲計りでなく、他人の爲にも社會一般の爲にも祈るべきである。祈る時は疑はざる心、亂れざる心を以て祈るべきである、義しき祈力ある祈には神は必ず耳を傾け給ふのである。

八。神に供ふべきもの、手を空くして神の前に出づべからずとは、幾度かくりかへされたる神の律法である。神の宏大なる化工を紀念し、神の靈妙なる祐助を祈り、神の豊濃なる恩籠を謝し、神の深遠なる攝理に一身を任ずるものが自ら何も捧げずして其聖前に出づるの理由はない。昔は獸血を捧げたが、今は吾々の捧ぐべきものは意志である。情念である。勢力である。時間である。物品である。生命である。口ばかりの禮拜、注意なき禮拜、半分の禮拜は、眞の禮拜でない。骨折りなき宗教、價安き宗教、折ふしの宗教は眞の宗教でない。眞の宗教は價が高い。費が多い。思慮を要し、勞力を要する。のである。眞の宗教は人の全心全力を要求するのである。若し捧ぐべきものに制限ありとせば、捧ぐる人の力に限りあると、捧ぐべき機會の與へられざるこの二つのみである。

九。我等は意志を神に捧げねばならぬ。人は考へずして一瞬間も

此世を過すことは出來ない。過去を考へ、將來を考へ、周圍を考へ、自己を考ふるのである。然れども宗教が吾々に要求する所は更に上を考ふる事である。所謂向上的思慮である。吾々の思想をして四方に散亂せしむる前に、天に騰上せしむることである。神は天に在りて、地上の心を要求し給ふのである。キリストは吾々に向つて、先づ神の國と其義を求めよと教へられた。(卅六〇)。私慾に心を奪はれ、私情に心を引かるゝ間は、また神に意思を捧げたものでない。我意思を神の意思に同化せしむることを努めねばならぬ。我動機を神の動機に一致せしむることを學ばねばならぬ。聖旨の如く成らせ給へとは信者の最後の祈禱である。常に神を思ふ人の心には神が住み給ふのである。

十。我等は情操を神に捧げねばならぬ。何人にもおのゝ愛の目的を有するものである。花鳥を愛するものもあり、山川を愛するものもあ

る、友を愛し、妻を愛し、子を愛す、愛は神聖なるものである、愛らしきものを愛し、愛すべきものを愛するは固より不可でないが、然れども我等の自ら願むべきことは、我等は果して人よりも神を愛して居るか、地よりも天を慕ふて居るか、物よりも靈を思ふて居るか、神の吾人に要求し給ふものは、最高の情操なることを忘れてはならぬ。

神を敬するのみでは足りない、神を畏るのみでは足りない、神を愛せねばならぬ、信者が神に對する義務は、敬神と云はんよりも、又畏神と云はんよりも、愛神である、子が親を愛するが如き愛の其程度に於ても、分量に於ても、ズット高く深く、又大なるものである、神を呼びて天に在す我等の父よと云ふのは、愛情が含んで居るからである。神を愛する爲に他を愛することを犠牲にせねばならぬこともあらう、假令富を欲することは悪しきことではないが、神に仕ふることに衝突するが如き場合あらば、其欲望

を制抑せなければならぬ、人は二人の主に事ふることはよろしくない。

十一。我等は勞力を神に捧げねばならぬ、人は一瞬間も考へずしては、生活し能はざるが如く、又力を用ゐずしては、生活し能はぬものである、何事にか自己の力を用ゐつゝあるものである、忍耐といひ、勇氣といひ、熱心といひ、自制といひ、皆力の動き方即ち勢力の變態を意味するものである、而して此力を用ひつゝあるのは、自分の最も愛するもの、爲か、自分が義務であると思ふもの、爲である、家族の爲か、社會の爲か、將た又自己の名譽の爲か、生活の爲か、快樂の爲かであらう、信者は自己の勞力を何よりも先に神の爲に捧ぐるものと考へねばならぬ、然しパリサイ宗の人々が陥りし如き弊害に陥らない様に注意すべきである、親を養ふ爲の勞力は神の爲に捧げねばならぬと云へば、親を養はずとも宜しいなど、思ふことは甚だ間違ひである。

我等は學問の爲に力を盡すもよし、事業の爲に力を盡すも悪しくない、去れども神の爲に盡すてふ一大觀念の下に動くべきである、神は常に我等の全心を要求し給ふのみならず、全力を要求し給ふのである。

十二。我等は物を神に捧げねばならぬ、人各々費すべきの必要を有して居る、衣食、家族、社交等の如きである、然るに教會慈善、傳道等直接或は間接に捧ぐるもの果して若干の比例に位するか、自家日用の必要多きを口實として神に捧ぐるものはなしといふものはないか、昔は神に捧ぐるを以て口實とし親を養はざるものがあつた、今は親を養ふを口實として神に捧げないものがある、毎月五圓以上の教會費を出すもの幾人ある、毎月百圓の經費を出す教會幾個ある、我國の教會には思慮を捧ぐるもの、勞力を捧ぐるもの決して少しとしない、而して物を捧ぐるものに至ては他の宗教より幾等の下にある、大に考へざるべからざる問題である。

八、如何に基督に従ふべきか

一。信者はキリストに従ふものである、キリストがガリラヤの海邊を歩て、ペテロとアンデレの二人の兄弟が網うてるを見て、我に従へ、我なんちを人を漁る者と爲さんと云ひ給ひしかば、彼等は直に其命に應じた(馬四〇十)。キリスト又海邊にて、アルバヨの子レビといふ者の税吏の役所に坐し居けるを見て、我に従へと曰ひ給ひければ、彼たちて従つた(可二〇)。キリスト又ガリラヤ途上ピリポにあひ、我に従へと云ひ給ひければ、ピリポはナタナエルをも導いて共に従ふた(約〇四三)。キリストの弟子の一人が主に先づゆきて父を葬ることを我に容せと云ひしとき、キリストは我に従へ死たる者に其死し者を葬らせよ(太八〇二)と云ひ給ふた。キリスト嘗て教を垂れ給ふて、人もし我に事へんとせば我に従ふべし、我

に事ふる者は我をる所に在ん人もし我に事ふれば我が父は之を貴ぶべしと云ひ給ふた(二約十二〇)。復活のキリストはペテロに向て三たび我羊を牧へと言ひし後、矢張り我に従へと命じ給ふた(約二十一)。

キリストを信するものはキリストに従ふものである、キリストが我に従へと言ひ給ひしは使徒と弟子に限れる命令ではなかつた、自ら信者と唱ふる凡てのものに向ての命令である。問題は如何にキリストに従ふべきかと云ふのである。

二。キリストの誠に従ふこと (一)相愛の義務 『若しなんぢら我を愛するならば我誠を守れ』(約十四)とはキリストの命令である、其誠とは何であるかと云ふに、『われ新誠を爾曹に與ふ、即ち爾曹相愛すべし』との是れなり。我なんぢらを愛する如く爾曹も相愛すべし。爾曹もし相愛せば、之に因て人々爾曹の我弟子なることを知るべし』(約十三)と、かく教へ給

ふた、人間相愛の義務はキリストの命令である、人を愛せずして信者たることは實際に於て出来ない、人を愛すれば、之に依て基督者たることが分かる、口にて信者たることを告白しても、他人に對する同情もなく、不親切な取扱をなすものは、口の信者であつて、心の信者でない、『我を呼て主よ』主よと云ふもの、悉く天國に入るにあらず、之に入るものは天に在ます我が父の旨に遵ふ者のみなり』(太七〇)と云ひ給ふたのは、此口の信者を誠め給ふたのである。(二)慈善の義務 『善を爲すと施捨を爲すことを忘るゝ勿れ』と希伯來書の記者は云つた、而して其理由として、『斯のごとき祭は神之を悦ばばなり』(十六三〇)と言ひ加へた、パウロも『機會あらば一般の人に善を爲すべし、信仰の族に對ひては別て之を爲すべし』とガラテヤ人に書き贈つた(十六〇)キリストが『衆人の前に汝らの光を輝かせ、然すれば衆人なんぢらの善き行爲を見て天に在す汝らの父を崇むべし』(太

六〇)と教へたまふたの同意義である。或は「凡て人に爲られんと思ふとは汝ら亦人にも其如くせよ。律法と豫言者は即ち是れなり」(太七〇)と命じ給ふたのも同主意である。慈善の義務は相愛の義務の一つであるが、特に之を命じ給ふたのは、相愛の精神を實行に現はす所のものであるからである。

三。キリストに近づくこと。「凡て勞れたる者、また重荷を負へる者は我に來れ、我なんぢらを安息せんと」はキリストの安慰の言である。(太十二十)。我等は皆重荷を負へるものである。國家の重荷、家政の重荷、事業の重荷、學問の重荷、其人の境遇に應じて特殊の重荷がある。貧乏人から富豪を見れば愉快さうに思はるゝが、それ相當の重荷がある。富豪から見れば貧民は子供の教養さへ重荷である。子供には父母の孝養が重荷である。身體の苦痛、思想の煩悶、凡て是れ重荷ならざるはない。其上尙一層重きもの

は罪の負ひ物である。斯くの如き人の世に向て、我に來れ、我なんぢらを安息せんと云ひ給ふた、安息せんとすの聖語に注意せねばならぬ。身體の苦痛が無くなつた時、煩悶が消え去つた時でも愉快に感ずるのであるが、罪の重荷がなくなつたときは尙ほ一層の愉快である。是れより大なる安息はない。此喜びを受けんにはキリストに近づくかねばならぬ。キリストは我に來れとて罪人を招き給ふ。醫者の許に行かずして病氣の癒されんことを望むのは無理である。パプテスマのヨハナが曾て二人の弟子と偕に立ち、イエスの行き給ふを見て神の羔を觀よと云つたので、弟子はイエスに従ひ往つた。イエス彼等を回顧て爾曹なにを求るやと問ひ給ひしかば、先生は何處に住み給ふかと問ふた。イエスは彼等に唯來り觀よと云ひ給ふた。彼等は其言に従ひ、行きてキリストの宿所に留り、道を聞て終には其弟子となつた(約一卅九)。信者はキリストの招きに應じて其許に行つたも

のであらうか或は餘りに遠く立つて見て居るではあるまいか、キリストの聲が聞えぬではあるまいか、何より先きにキリストに近よりて親しくなることが必要である。かくして安息は自然に來るのである。

四。キリストの語を守ることはキリストに従ふ必要條件である。キリストの言に、「若し人われを愛せば我言を守らん、且つわが父は之を愛せん、我儕きたりて彼と偕に住むべし」(約十四)とあり、又「われ誠に實に爾曹に告げん、人もし我道を守らば窮なく死を見ざるべし」(約八〇)とある。キリスト一日舟中にて人々に播種の譬を語り、後弟子等に説明してかく云ひ給ふた、「天國の教を聞て悟らざれば、惡鬼きたりて其心に播れたる種を奪ふ、是れ路の旁に播たる種なり、磽地に播れたる種は、是れ教を聽て速かに喜び受れども、己に根なければ、暫時のみ、教の爲に患難あるひは迫らるゝ事の起る時は、忽ち道に礙く者なり、また棘の中に播れたる種は、是

れ教を聽けども、此世の思慮と貨財の惑に教を蔽はれて實らざる者なり、沃壤に播れたる種は、是れ教を聽て悟り實を結こそ、或は百倍或は六十倍あるひは三十倍する者なり」(太十三)と、信者は皆道の種を播かれたるものであるが、問題は路の旁に落ちた種の如きものであつて、悪習慣の足に踏み付けられた頑固な性質に一寸神の語を置いたのみであるか、或は磽地の種に均しく神の語がまだ心底に根ざして居らないか、或は棘の中の種であつて世俗的誘惑の爲に其種を枯死せしめんとする情態にあるか、さなくば沃壤の種であつて幾十倍百倍の果實を來たさんとするものであるか、四つの中の其一であらう。キリストに従ふものはキリストの語を守るものである、前にキリストの教を守るべきを述べたが、是れはキリストの教訓の一であつて全部ではない、誠の語の外に慰安の語もあり、奨励の語もあり、道徳的教訓もあり、心靈的暗示もあり、神に關し、世に關し、

人に關し、己れに關して、機會に應じて洩れなく示し給ふた、特殊の場合に就て一々特殊の實例を示し給ふたのではないが、凡ての場合に適用されるべき原則を垂れ給ふたのである。キリストの語を守らない信者がある筈はない、理想が高く、急に達し得られない事もあらう、自ら弱くして屢々倒れんとすることもあらうが、信者である以上は務めて其語を守らんこと、この勇氣を有すべきである。

五。犠牲献身の精神が必要である。キリスト下曾て弟子に「若われに従はんと欲ふ者は己を棄て、その十字架を負て我に従へ、その生命を保全せんとする者は之を失ひ、我ために其生命を失ふ者は之を得べければ也」(太四十六)と云ひ給ふた、又「その十字架を任て我に従はざる者も我に協ざる者なり」(太八十)と述べ給ふた、ルカの傳ふる語に依れば「その十字架を任ずして我に従ふ者は我弟子と爲ることを得ず」(路廿七)と十字架

は犠牲の表號である、パウロはピリピ人にかく書て居る、「爾曹キリストイエスの意を以て意とすべし、彼は神の體にて居しかど自ら其神と匹敵在ごころのこゝを棄難きこと、意はず反て己を虚うし、僕の貌をとりて人の如くなれり、既に人の如き形狀にて現はれ、己を卑し、死に至るまで順ひ、十字架の死をさへ受くるに至れり」(腓二八)と、キリストの十字架はキリスト全生涯の苦難を意味するものであつて、殊に十字架上磔死の苦感を指すのである、此犠牲的生涯は人世を罪惡より救ひ出さん爲に與へられたのである、世に罪がなかつたならば、キリストの十字架も無かつたであらう。ゆゑに十字架を負ふて我に従へと言ひ給ひしは神に事へんには如何なる困難があらうとも、キリストの甘じ給ひし苦生涯に倣ふて忍ばねばならぬ、斯くの如き精神でなければ、キリストの弟子となる資格はない、心靈上の慰安と肉體の愉快とは必ずしも一致するものでない、又天

國の奉仕と社會の關係とが何時でも並行する譯に行かぬ、何れかを犠牲にせねばならぬ、二人の主事に事へんとせば、双方に不忠者とならざるを得ない、或る青年がキリストに來て、かぎりなき生を得んが爲に何の善事を行ふべきかと問ふと、誠を守れと答へ給ふた、誠とは何かと問ひ返すと、キリストは更に答へて、殺す勿れ、姦淫する勿れ、盜む勿れ、妄りの證を立る勿れ、爾の父母を敬へ、又己の如く爾の隣を愛すべし、是れであると云ひ給ふた、青年は是等は皆幼少の時より守れるものであると云つたが、キリストは爾なほ一を缺く、ゆきて其所有をうり、貧者に施せ、然ば天に於て財あらん、而して來り十字架を操て我に従へと云ひ給ふた、青年は之れを聞き愛へて去つたとある、此青年は富豪の子であつた(太十九廿一)。信者にはなりたかつたが、自己の所有物を以て人の爲に善事をなし、度くはなかつた、天國の富と地上の富と兩方共に得たいと思つた、其富の用の方々に依つて

は得らるゝともあらうが、實際地上の富に熱中するものは、中々天國のこと考ふるものでないのである。今日の信者は此青年の如き富豪ばかりでもあるまいから、此實例は凡てに適用は出來ぬ様であるが、併しキリストの意思は自分の有するペストを神の爲に捧げよと云ふのである。知識か、地位か、辯舌か、官位か、之を神の榮光を現はす爲に用ひねばならぬ。

六。キリストを記念すると、主イエス付さるゝ、晩に餅を取り、謝して後、これを擘き、弟子に予へて言ひたまひけるは、取りて食せよ、此は汝らの爲に予ふる我が身なり、汝ら之をなして我を記念せよ、又食してのち、盃を執りて謝し、彼れらに予へて言ひたまひけるは、汝ら皆この盃より飲め、此れは新約の我血にして罪を赦さんとして、汝ら及衆の人のために流す所のものなり、汝ら之をなして飲む毎に我を記念せよと。キリストは自分が其身を献げて犠牲となし給ひし紀念の式を建て、再び來るまで常に此れ

を行へど福音の中に命じ給ふた今日教會に於て聖餐式と稱するものは是れである。信者はキリストの死と苦楚を紀念し、其所定に従ひ、餅と葡萄酒を受けて、其尊き身と血に與ることを努めねばならぬ、かくして天の恩に充たされ、我等キリストに居り、キリスト又我らに在ますことを得るのである。此聖餐を受くるには二の事が伴はねばならぬ、先づ救主キリストの死と苦楚をもつて世をあがなひ給ひしことを父と子と聖靈に感謝すると共に、罪の懺悔をなすべきである、意思と言語と行爲をもつて罪を犯し、幾度もなく主に反き、主の震怒を惹たることを懺悔し、今よりのち行爲を改めて恒に主に事へ、聖旨に合ひ、聖名の榮光を發揚することを努めねばならぬ、パンと葡萄酒を以てキリストが我等の爲に流し給へる血と、裂き給へる身體を紀念するは、キリストの精神を以て我等の精神を養ふことに外ならない。

七。最後にキリストの模範に従ふこと、キリストは弟子等に向つて

「我なんぢらに例を示せり、此はなんぢらに行し如く爾曹にも行しめんが爲なり」(約十三)と云ひ給ふた。ペテロは其前書第二章二十一節に「キリスト爾曹の爲に苦をうけ爾曹をして己の跡に隨はしめんとて式を爾曹に遺し給へり」と云つた、キリストに従ふものはキリストの行に従ふものである、キリストは人類としての理想的代表者であるが、又個人としては模範的人物である、男でも、女でも、老人でも、青年でも、行の標準をキリストに取るべきである、信者はキリスト教に従ふばかりでなく、キリストの足跡に従つて世を渡らねばならぬ、日常の事にて此場合は何としたら宜しきかと感ふことあらば、キリストが自分の地位に居らねば、何と處分せられたであらうかと先づ考へて見るべきである、此心得さへあれば、人の行に間違はあるまい、假令間違があつても、此精神でや

つたことなれば、免るるゝであらう。

九、如何に己れを修むべきや

一、信者の修養法は如何 信者として吾々は如何に他人に盡すべきか、如何に神に事ふべきか、如何にキリストに學ぶべきかは、前より述べ来た事である、最後に吾々自身は信者として如何に己を修むべきか、即ち自己に對する義務は如何なるものか、信者としての修養法は如何と云ふ事に就て考へて見たいのである、無論前より述べ来た所にて大體は盡して居ると思ふが、細かな點に於て、前に説いた何れの題目にも入られな

いものがある、別に一題目として之を説くのを必要を感じるのである、例に依り思想の順序を亂さざる爲に、之を言語と行爲と思想の三項に分ち、其一項毎に我々が修養すべき事柄を列擧して考へたいと思ふ。

二。言語は大なる力である、聖ヤコブが云へる如く、我儕言を以て主なる父を祝ひ、また之をもて神の形に像りて造られたる人を誣ふことも出来る(各三) 人もし言に愆なくば是全き人である(各三) 三寸の舌よく城を傾くることもあれば、片言以て萬軍を動かすこともある、皇國の興廢此一戰にあり、各員夫れ努力せよとの一句が如何に艦隊の軍氣を振起せしかば、誰も知つて居る所である、近く個人の上にとつても親の一言が子の全生活を形成し、師の一言が子弟の心機を一轉したる例は、少くない、之れに反して、惡口毒舌が如何に大なる迷惑を他に及ぼすかは、誰しも幾分の實驗を有して居る、此意味に於て聖ヤコブは舌は火なりと云つて居る、微火よく大なる林を燃し盡す(各三) ののである、言語は人をして樂ましめ、笑はしめ、慰を得せしめ、氣を勵まさしめ、人の徳を立てしむる力あると同時に、言語は又人をして泣かしめ、憂へしめ、怒らしめ、時としては人の名譽

と人格を破壊せしむることもある。口に譽を置くときは全體を欺すべし
○雅三とあるが、其通りである。慎むべきは言語である。

三。言語に最も必要なのは真である。パウロがロマ人に贈つた書翰
の中に、「我キリストに屬する者なれば我が言は真にして偽りなし」(羅九)

とある。予は信者であるがゆゑに、決して偽りを言はぬとの意味である。キ
リストは「爾曹たい是々否々といへ此より過るは惡より出づるなり」

(太七〇)と戒められた。ある事をなすと云ひ、ない事があるといひ、小さき事
を大きく云ひ、大きい事を小さく云ひ、人を誤解せしむる様な言ひ廻はし

をなし、人を迷はしむる様な詭辯を用ひ、表面を述べて内實を隠さんと欲
し、一部を言つて全部であるかの如く解釋せしめんとするは何れも虚偽

の變態である。一たび偽れば必ず二たび偽るのである。三たび四たびとな
れば最早取返しが付かなくなる。全體虚偽の罪と云ふものは人に對して

こそなし得べけれ、神の前には出來得ないことである。羽衣の曲に「天に
偽りなきものを」と云ふ句がある。神自身に偽りなきのみならず、人にた
まさるゝ事もないのである。且又人に對して偽るものは自ら偽り人とな
ることを記憶せねばならぬ。即ち虚偽の罪は反響して自己の人格を破る
ことになる。恐ろしきものである。

四。言語は神の榮を顯はし、人の徳を立つること、に用ふべし。以弗所
書第四章二十九節に「凡そ汚れたる言を爾曹の口より出すこと勿れ、唯
時に從ひて人の徳を建つべき善事をいひ、聽く者をして益あらしむべし」
とある。汚れたる言を爾曹の口より出すこと勿れとは消極的に言語の使
用を誠められたのである。人の徳を立つべき善事をいへとは積極的に言
語の活用を教へられたのである。信者の最も陥り易き罪惡は他人の批
評である。キリストは人を裁判する事勿れと教へられたのは、人に此弱點

があるからである、自分で人の批評をするのは無論悪いが、人の噂を他に傳へて面白がるのも同罪である、今日の信者たる我々は未だ此點に就て充分の修養が出来てない甚だ遺憾である、人を誹謗する、人を讒言する、人を罵詈する、人を冷評する、未信者は笑談の中に之をなすが、信者は眞面目な顔で之をなす、「その兄弟を愚者といふ者は集議に干らん、又狂妄よといふ者は干るべし」(太五〇)と教へられて居るが、信者にして此點を犯さざるもの幾人ある之を思へば背に汗を生ずるのである。

常に神の榮を顯はし、人の徳を立つる事を心懸けて居れば、言語も自然に改まるであらう、決して阿り諂ふ必要はない、親切に、柔和に時に従つて語れば人の喜びとも慰めともなるのである、同じ事を言ふにしても、角の立つ言ひ方もあれば、柔らかに聞ゆる言ひ方もある、同じ言ひ方にも、表面丈けか心からか直に分るのである、我々信者は言語の用の方の宜しきに

依て、いかにも彼れは信者であると人にも思はるゝ様になりたいものである、パウロは哥林多前書第十四章二十六節にかく云へり、「兄弟よ爾曹あつまれる時おのゝに或は頌詩あり或は教誨あり或は方言あり或は黙示あり或は翻譯あり悉く徳を建んために之を爲すべし」と。

五。神の意思を行ふこと、これが行爲の一大原則である、キリストは「すべて我が天に在す父の旨を行ふ者は是わが兄弟わが姉妹わが母なり」(太五十二)と言ひ給ふた、キリスト自身に於ても「我を遣し、者の旨に隨ひ其工を成畢る是わが糧也」(約十四)と云つて神の聖旨を遂行すること、自分が自分一生の事業であると思はれた、昔し詩人も「汝は我神なり聖旨を行ふことを我に教へ給へ」(詩百四十)と呼び、「我神よ我は聖旨に従ふを喜ぶ」(同八十四)と歌ふた。神を信する我等信者は何事をなすにも、これは神の聖旨なるや否やを考へて着手せねばならぬ、神の意思に背くもの

と思つたならば、假令それが自己の利益になるやうに見えてもなすべきことでない、我事業を選択するに、決して自己中心の考へを持つべきでない。

六。神の榮光の爲に行ふこと。パウロはコリント人に書き贈て「爾曹食ふにも飲にも何事を行ふにも凡て神の榮を顯はすやうに行ふべし」(前十)と云つた、神の意思を遂行することが、人間行爲の標準であるならば、神の榮光を顯はすことは人間行爲の目的である、即ち人は自己の名譽や、勢力や、富貴を目的とすべきでない、神の榮光を發揚することである、神の榮光を發揚するには、善行をなさねばならぬ、神を信せぬ者の成し得ないことをも成さねばならぬ、信者の行はさすが違つた處がある人にも認めらるゝに至らば、是れを譽を神に歸する所以である、名譽や、勢力や、富貴は神が至當と思ひ給ふときは必ず善行者に與へ給ふであらう、目的は

目的である、其目的を達する事が出来たならば、其人に必要であるものは何でも賜はるであらう。

七。同情の行たるべきこと。キリストは「凡て人に爲られんと思ふことは汝ら亦人にも其如くせよ、是れ律法と豫言者たるなり」(太七〇)と云ひ給ふた。自分にして欲しくないと思ふことを人にもしないのは勿論の事であるが、キリストの教は其れ以上である、自分にして欲しいと思ふことを人にもせよと云ひ給ふた、自分の病苦に際しては人の慰問看護は有り難く思ふものである、さすれば病苦に際しては、自分の及ぶだけ慰問もし、看護もする筈である、社會の人々が此金言さへ實行すれば何の騒動も起らない、何の悶着も出来ない筈である、今日慈善救濟の事業が盛に勃興して來たのは喜ばしき事である、唯此等が皆同情の念より來るものとならねばならぬ、同情は報酬を目的としない、唯與へるだけであつて、受

くることを豫期しないのである。

八。相互の徳を立つる行をなすべし。帖撒羅尼迦前書第五章十一節には、「爾曹常に行る如く互に慰め、又おのの徳を相建べし」とある。羅馬書第十五章二節に、「我儕おのの隣の徳を建たために善をもて之を悦ばすべし」とある。同第十四章十九節に、「我儕人と和睦せんこと、相互に徳を建んこと、を追求むべし」とある。哥林多前書第八章一節に、「智識は人を驕しむ、然ど愛は徳を建るもの也」とある。人の害になることをせぬのは云ふ迄もなく、人の徳を立つることを行はねばならぬ。言語の項に於て述べた如く、行爲の點に於ても同様である。「愛は寛忍をなし、又人の益を圖るなり、愛は非禮を行はず」(三〇四)とパウロは言へり。

九。行爲には自信力が必要である。信者の自信力は精神一到何事か成らざらんと云ふのでなく、「我は我に力を予るキリストに因て諸の事

を爲得るなり」(十三四)と云ふにある。キリストの力に依て之を成し遂ぐる事が出来るこの確信である。キリスト自身も「爾曹われと離るゝときは何事もなし能はず」(約五十五)と云ひ給ふた。パウロは「われ貧賤に居るの道を知り、また富厚に居るの道を知り、飽ことも、飢ことも、豊ことも、歉ことも、諸の事に於て我これを熟練せり」(腓四〇)と告白せしが、此熟練は何處より來りしかと云ふに、キリストに依て其力を得たのである。是れが信者の實驗とならなければならぬ。軍人が勇を起すも、役人が誘惑に打勝つも、丁稚小僧が艱難に耐ふるも、病人が其病苦を忍ぶも、皆信仰に依て來るキリストの力である。

十。善良なる心を養ふこと。前に述べた言語も行爲も大に修養すべきであるが、心は一層修養の必要がある。如何となれば、正しき言語も、麗はしき行爲も、善良なる心より出でたものでなければ、其價值がないのであ

る故にキリストは特に心に重きを置き給ふたのである。「心の貧乏者は
 福なり、天國は即ち其人の者なれば也」(太五)「心の清き者は福なり、其人
 は神を見ることを得べければなり」(八)と云つて心の清淨潔白なるべき
 を教へ給ふた、パウロは信者に勸むるにかく云つて居る「爾曹神に選れ
 て聖潔かつ愛せらるゝ者となれば慈悲、憐愍、謙遜、柔和、忍耐を衣よ、爾曹
 互に容忍をなし若し人に責べき事あらば之を恕せ、キリスト爾曹を恕し
 給へる如く爾曹も然すべし、この諸の事の外に愛を加へよ、愛は衆徳の帯
 なり、爾曹キリストの賜ふ平安をして其心を主らしめよ、爾曹一體に在て
 此平安に至るべき召を蒙れり、爾曹恩に感ずべし、キリストの道をして爾
 曹の心に存て充足しめ、諸の智慧により詩と歌と靈に感じて作れる賦と
 を以て互に相教へ相勸め、恩に感じて心の中に神を讚美すべし」(西三、十、十一)
 と親切にして至れりである。此心得が我々信者一同になくはならぬ

十一。思想罪に陥らぬ様注意すること 法律は現行犯を罰するので
 あるが、宗教は思想犯をも罰するのである。山上の垂訓に於てキリスト
 は斯く誡め給ふた、「古の人に告て殺すこと勿れ、殺す者は審判に干らんと
 言ること有は爾曹が聞し所なり、然ぞ我なんちらに告ん、凡そ婦を見て色情を起す
 其兄弟を怒る者は審判に干らん」(太五)と即ち人は思想に於て人を殺
 すことあるものである。「又古の人に告て姦淫すること勿れ、言ることあ
 るは爾曹が聞し所なり、然ぞ我なんちらに告ん、凡そ婦を見て色情を起す
 者は中心すでに姦淫したる也」(太五)と即ち人は思想に於て姦淫罪を
 犯すものである、斯くの如く人は思想に於て貪り、盗み、盗み、父母に不孝に、兄弟
 に不悌に、君主に不忠に、朋友に不信なるものである、言行一致は無論の事
 であるが、思想も一致して、始めて善良なる人が出来るのである。

十二。懺悔の祈禱 信者の修養の最大秘訣は祈禱である、左の祈禱は

聖餐を受くる時だけでなく、何時も其精神を以て神の前に跪くべきである(祈禱書百四十五頁)。

我らの主イエスキリストの父、萬のもの、造主、萬の人の審主なる全能の神よ、我ら言語と行爲を以て罪を犯し、幾度となく主に反き、主の震怒を惹きたることを悲みて懺悔す、我ら深く悔み、眞實に罪を嗟き、之を思ひ出る毎に憂ひ、その重負に堪へがたし、慈悲ふかき父よ、我らを憐みたまへ、我らを憐みたまへ、聖子我らの主イエスキリストの功によりて過し罪を悉皆赦し、今よりのち行爲を改めて、恒に主に事へ、聖旨に合ひ、聖名の榮光を發揚させたまへ、主イエスキリストによりて希ひたてまつる、アーメン。

明治四十五年四月廿二日印刷
明治四十五年四月廿五日發行



著者 元田作之進

發行者 東京市神田區小川町一番地
イ、ライアンソン

印刷者 横濱市太田町五丁目八十七番地
村岡平吉

印刷所 横濱市山下町八十一番地
福音印刷合資會社

發行所 (東京市神田區) 小川町一番地 普光社
販賣所 (大阪市西區) 京町堀三丁目 榮光社
同 (神戸市中山手通り) 三丁目外五番 日本聖公會出版社

元田作之進著

未信者に與ふる書

再版
定價金 貳十錢
郵税金 貳十錢

吾人が持てる基督教の信仰の如何なるものなるや未だ斯道に入らざる人に語りて、俱に此福音の道を歩まんことは吾等の熱望なり。茲に吾人は元田先生の通して未だ基督教を信ぜざる人々に一書を寄せ、諸君を吾等の信仰に招かんとするなり。基督教は抑も如何なるものぞ、乞ふ「さりて讀め」

菅寅吉譯

普公原理

(近刊)

岩井順一譯

希伯來民族史

定價金壹圓五十錢
上製金壹圓八十錢

舊約聖書に關する一般的な書物及び研究が非常に要求されて居るさいふ事は一般に認めらるゝ所である。舊約聖書の諸記録は其歴史の繪圖の輪廓を明かにすれば更に興味深く更に教訓多きものとなるべきである本書は實に此繪圖の輪廓を示すものである。

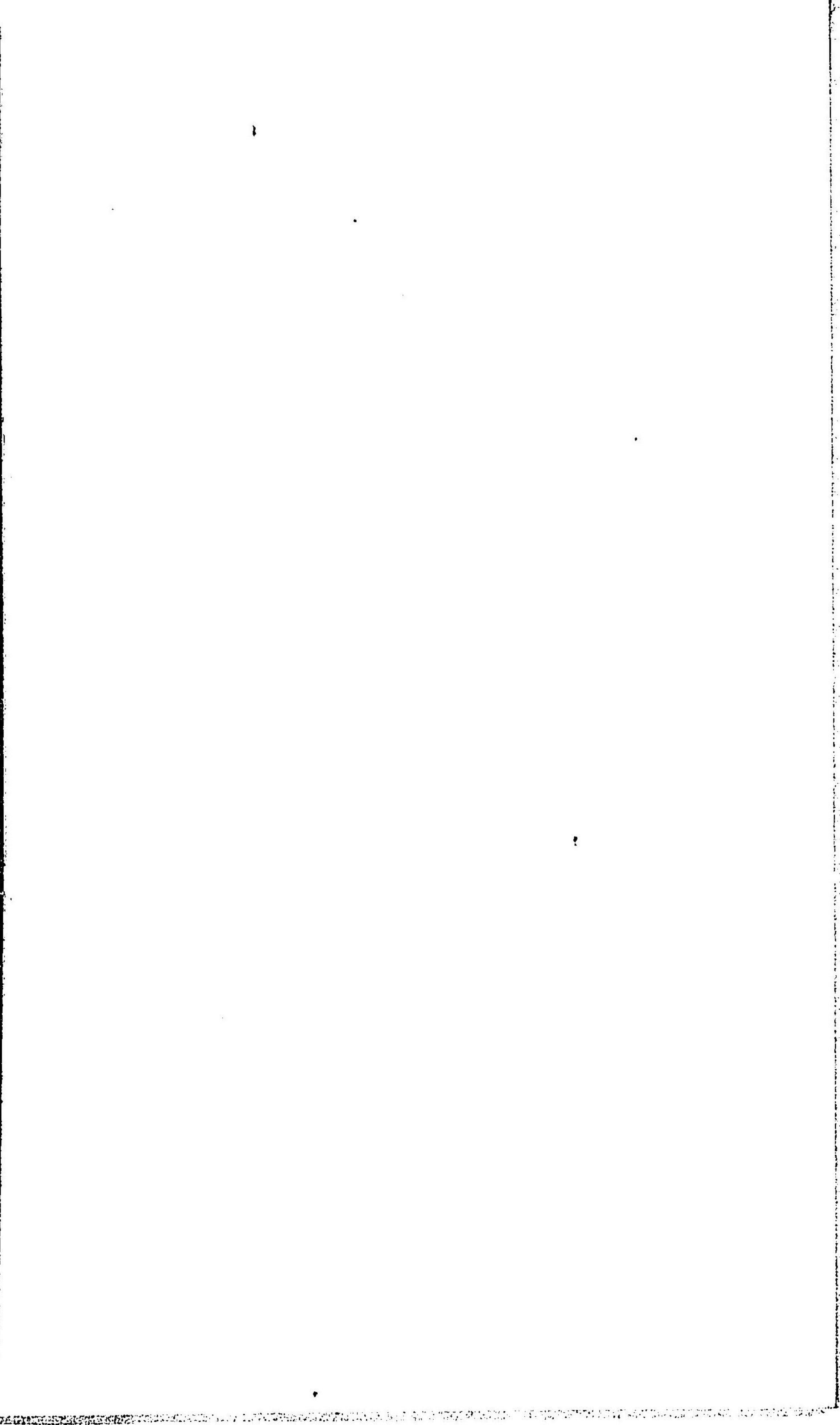
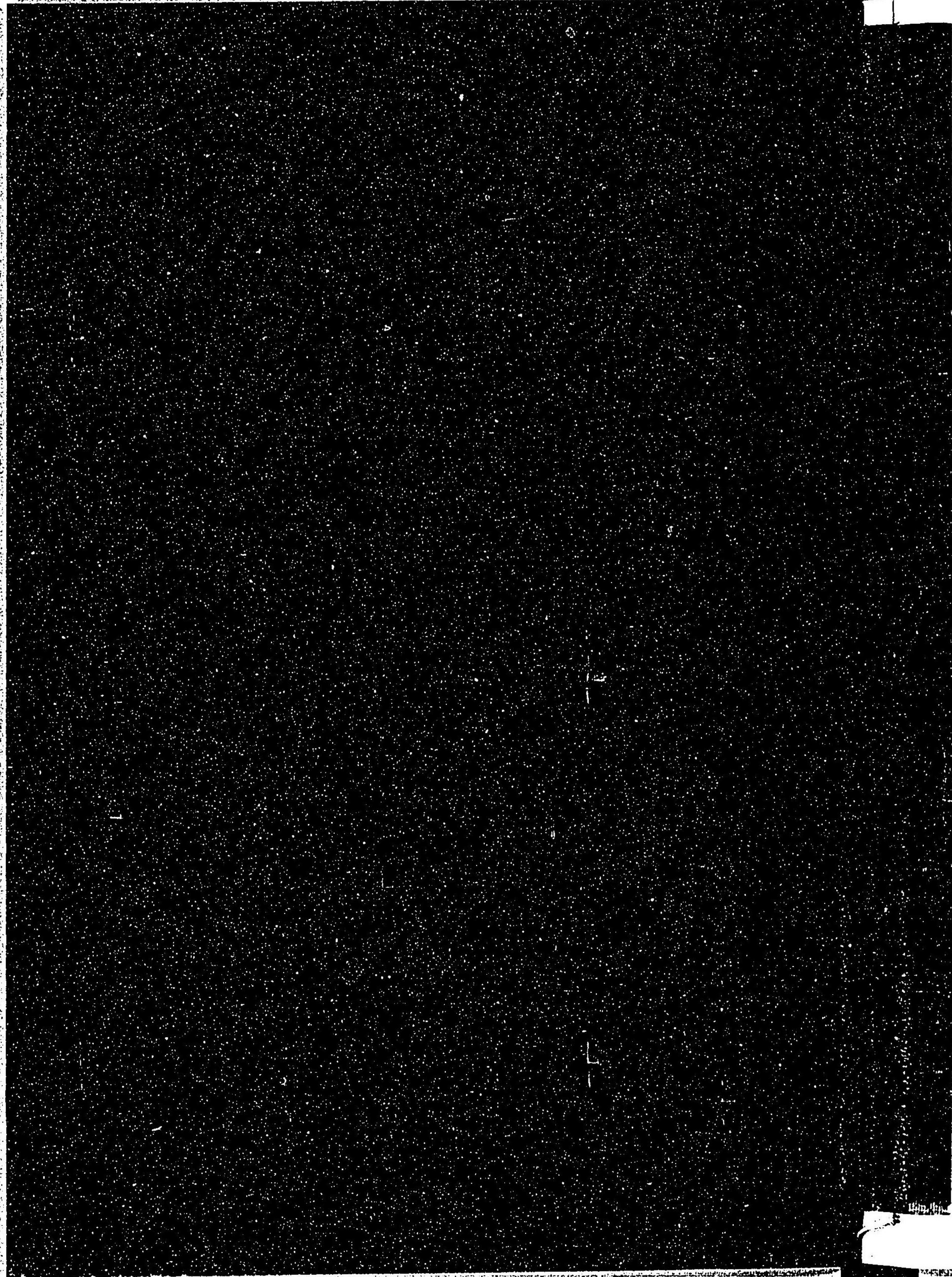
元田作之進著

日本聖公會史

四六版二八〇頁
定價金 三十五錢
並製金 四十錢
上製金 四十五錢
郵税金 六錢

我らは近く開教五十年を送りて、益々發展の機運に向はんとするものなり。顧みるに五十年の星霜決して短しとなさず、幾多の教條は其中にあるべし。許多の歴史活史は其中に起伏せん。今にして吾等之を讀む。多量の教訓其の中にあらん。

目次 緒言 第一章 宣教時代 第二章 組織時代 第三章 發達時代 第四章 聖公會の事業





信者に與ふる書

元田作之進

国立国会図書館

020803-000-7

特47-785

信者の与ふる書

元田 作之進/著

M45

ABI-0629



特

7

